Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P 11

幼児の「みてて」発話、その関係を繋ぐ図式化の試み

福崎　淳子
（日本女子大学）

【目的】

幼児の「みてて」発話は、見せようとして「みてて」と呼びかける行為者の＜発話児＞と、呼びかけられる相手の＜発話相手＞、さらに発話児が見せようとしているモノや行為である＜対象＞の三つの関係（三項関係）から成り立っている。

本報告では、「みてて」発話において、発話児・発話相手・対象の関係を繋ぐ媒介を分析しながら、三つの関係の構造を考察し、その図式化を試みる。

【方法】

1999 年 4 月に都内公立幼稚園の３歳児クラスに入園し、2002 年３月に卒園した園児 28 名のクラスにおいて、3 年間の縦断的参加観察を行った。その観察によって得たフィールドノートとビデオの記録をもとに、ことばによる「みてて」発話の事例を 1,453 事例抽出した。

本報告では、それらの事例において発話児の「みてて」に対し、発話相手から応答のあった事例の内、同じ質の内容の中では時期的に最初に観察され、内容や対象に質的違いが認められる５事例を、観察された順に時系列的に取り上げた。この５事例について、発話児・発話相手・対象の関係を繋ぐ媒介を質的に分析し、その構造の図式化を試みた。

【事例と考察】

1．三項関係の基本形

【事例１：ほら　みてて】

A子が登園後、ロッカーにカバンをおくと、「せんせい　ほら　みてて」と参加観察者(私)のところに走り寄り、上着のポケットについている人形のアップリケを指さし、毛糸でできているおさげ髪を上にあげて見せる。「わー　かわいいね」と私がいうと、得意そうな笑顔を見せてうなずき、自分のロッカーに戻って、朝の支度を続ける。(1999.4.14.)

【事例２：笑ってうなずく】

R子がボールをロッカーに向けて蹴ろうとするが、つま先がうまくボールにあたらない。しかし、何度か蹴りながら、少し離れたところで他児とやりとりしている保育者の方向に目を数回向ける。それから「せんせい　みてて」と保育者に向かって叫ぶ。保育者のまなざしが向けられ、「みてるよ」という返事が返ってくると、R子は笑いながらボールを蹴ってみせる。保育者が「わー　サッカーしてるみたいだね」というと、うまくボールはあたらないのだが、保育者の顔を見て笑ってうなずく。(1999.4.14.)

事例１の対象は、発話児が気に入っているモノ（肯定的なモノ）を見せることによって、そのかわいさを発話相手と共有することで三項関係が成り立っている。これに対し事例２は、発話児が見せようとしている行為は決して上手にできているわけではなく（否定的なモノ）、発話相手のまなざしを得ることが目的となっている。このように事例１と２は、見せようとしている対象の質に違いはあるが、発話相手からの共感的応答によって対象を共有することで、発話児と発話相手の関係が繋がっている。このような「みてて」発話を、三項関係の基本形として考えてみたい（図１）。

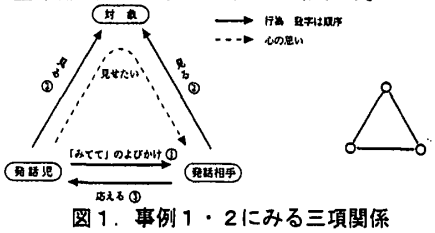

図１．事例１・２にみる三項関係

2．三項関係の対称性

【事例３：わたしもできる】

I 男がフラフープを立ててくるくると回しているのを、保育者に「せんせい　みてて」といってＩ男が見せ、保育者から「わーじょうず」と誉められていると、近くでそれを見ていたM子もフラフープを持ってきて保育者のそばに来る。「せんせい　みてて　わたしも一　みせてあげるからね」といって、Ｉ男と同じようにフラフープを立ててくるくると回す。フラフープがくるっと一回転すると保育者の顔を見る。「まわったまわったね　Mちゃんもじょうず」と保育者にいわれ、M子は笑ってうなずきながらＩ男の顔を見る。Ｉ男もM子の方を見るが、もう一度フラフープを立ててくるっと回し、「やったー」といって保育者の顔を見る。M子もフラフープをくるっと一回転させ、フラフープがくるくると床に落ちていくところを指さしながら、「せんせい ほら みててみてて」といって保育者の方を見る。保育者から「まわってるねー」という返事が返ってくる。(1999.5.1)

事例３は、ひとつの成立した「みてて」発話の三項関係が媒介となり、触発された他者によってもうひとつの三項関係が生まれている。発話児と発話相手の関係は、各々の「みてて」発話によって対象を共有することで繋がれているが、さらに、互いの「みてて」発話における三項関係の成立が媒介となって、ふたつの「みてて」発話が同じ発話相手を軸に繋がれている。このような関係を、三項関係の対称性と考えてみたい（図２）。

NII-Electronic Library Service

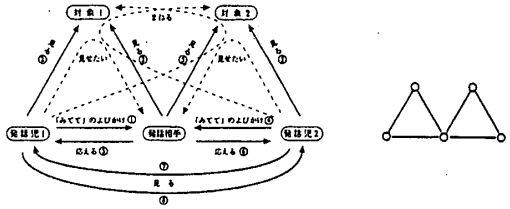

図２．事例３にみる三項関係の対称性

３．三項関係から四項関係へ

【事例４：お兄ちゃん(年中組)になったんだ】

4歳児クラスのK男がホールの角に置いてある高めの跳び箱の上から、ぴょんと跳び降りる遊びをしていると、3歳児がきてK男の方を見上げる。3歳児がじっと見続けていると、K男は跳び箱の上から離れたところにいる保育者に向かって「せんせーい　みててー」と叫んで、勢いよく跳び降りる。保育者から「みてるよ」「わーすごいねー」という声が聞こえてくる。しかし、K男は保育者の方は見ずに、跳び降りると3歳児の方を向いて得意そうな顔を見せる。K男はまた跳び箱にのり、今度は「シュワッ」といいながらポーズをとって跳び降り、また3歳児の方を見る。K男は友だちがそばに来るまでこの遊びを繰り返す。(2000.5.6.)

事例４は、間接的な発話相手(「みてて」と呼びかけていない他者)の視線を感じる発話児の思いが、「みてて」発話によって直接的な発話相手（直接呼びかけた相手）との関係を繋げることで、間接的な発話相手を取り込んでいる。直接的な発話相手は、間接的な発話相手を引きつけるための媒介役になっている。このような４つを繋ぐ関係を四項関係として考えてみたい(図３)。

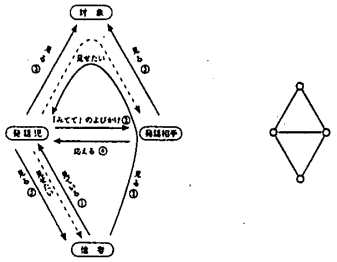

図３．事例４にみる四項関係

４．三項関係の二重性

【事例5-a：小さな声で「みてて」】

降園時に、園の玄関には園児たちがクラスごとに一列に並んでいる。私がA男の忘れ物を届けに玄関に行くと、4歳児クラスの列の後ろにいたK子が、「ふくざきせんせい　みてて」とやっと私に聞こえるくらいの小さな声でいいながら、カバンについているマスコットの手を振って私の方を見る。私と目が合い、私がうなずきながら手を振り「Kちゃんさよなら」という。K子もとてもうれしそうな顔をして自分の両手を大振りし、私の目を見てにこっと笑いながら「ふくざきせんせい　さよなら」と元気な声でいう。(2000.5.17)

【事例5-b：あっちいって】(事例5-aの前の状況)

帰り支度前のクラス集合時間に、K子たちが外からなかなか教室に戻って来ないため、私が「A先生のお話始まるよ」と呼びに行く、Y子とI男は駆け足で教室に向かうが、K子は「ここにいる」といって動かない。「じゃ、先に行ってるね」といって離れる。教室に戻る途中で私が振り返ると、K子は「あっちいって」と叫び後ろを向く。私が教室の入口に入りかけた所でもう一度振り返ると、K子は園庭の真中まで来ていたが、急いで逆戻りする。私が教室の中に入ってからまた振り返ると、K子も入口まで来ていたが、さっと背をかがめて隠れる。私が気づかない振りをすると、私の視野に入る所まで来てから、さっと園長室に駆けていく。

【事例5-c：園長先生に返さなくちゃ】(事例5-bに続く状況)

私が園長室に行くと、K子は私の顔を見ながら少し笑みを浮かべて「おこられるからかえる」といって、自分から私と手をつなぎ園長室を出る。しかし、教室に戻る途中で、K子は「ほら　えんちょうせんせいにかえさなくちゃ」といってボールペンを見せ、さっと園長室に駆けて行く。少し待ってもK子が来ないので、私も園長室に行くと、K子は「ここにいる」といいながらボールペンで何かを書いている。私は「もうお部屋に行くね」と少し語気を強めて言い、園長室を離れる。降園時間になり4歳児クラスの子どもたちは玄関に向かう。K子の帰り支度を持ってB先生が園長室に行くと、園長先生と出て来たK子と出会う。K子はそこで降園支度をして玄関に行く。

事例５では、「みてて」発話によってK子が見せているモノは、手を振るマスコット(対象１)であり、発話相手である私もそのマスコットを共有し、K子に応えている。しかし、対象１を媒介にもうひとつの見せたいモノとして、K子の私への謝罪の思いという目に見えない心の動き(対象２)が、K子と私を繋げている。K子の小さな「みてて」発話の声が元気な「さよなら」の声に変わったとき、発話児・発話相手・対象２というもうひとつの三項関係が生まれている。ここには図２に示した発話相手を軸とする＜三項関係の対称性＞や、図３に示した目に見える他者を取り込む＜四項関係＞とは異なる関係の構造が考えられる。目に見えない対象２を共有する発話児と発話相手の繋がりは、対象１の共有により生まれており、その構造を三項関係の二重性と考えてみたい(図４)。

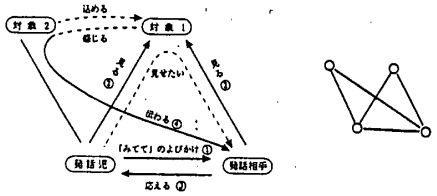

図４．事例５にみる三項関係の二重性

このように、「みてて」発話には、ひとつの三項関係の成立の上に、さらにこの三項関係を媒介とした関係が生まれており、それを関係を繋ぐ＜媒介の二重性＞としてとらえてみたいと考えている。

NII-Electronic Library Service